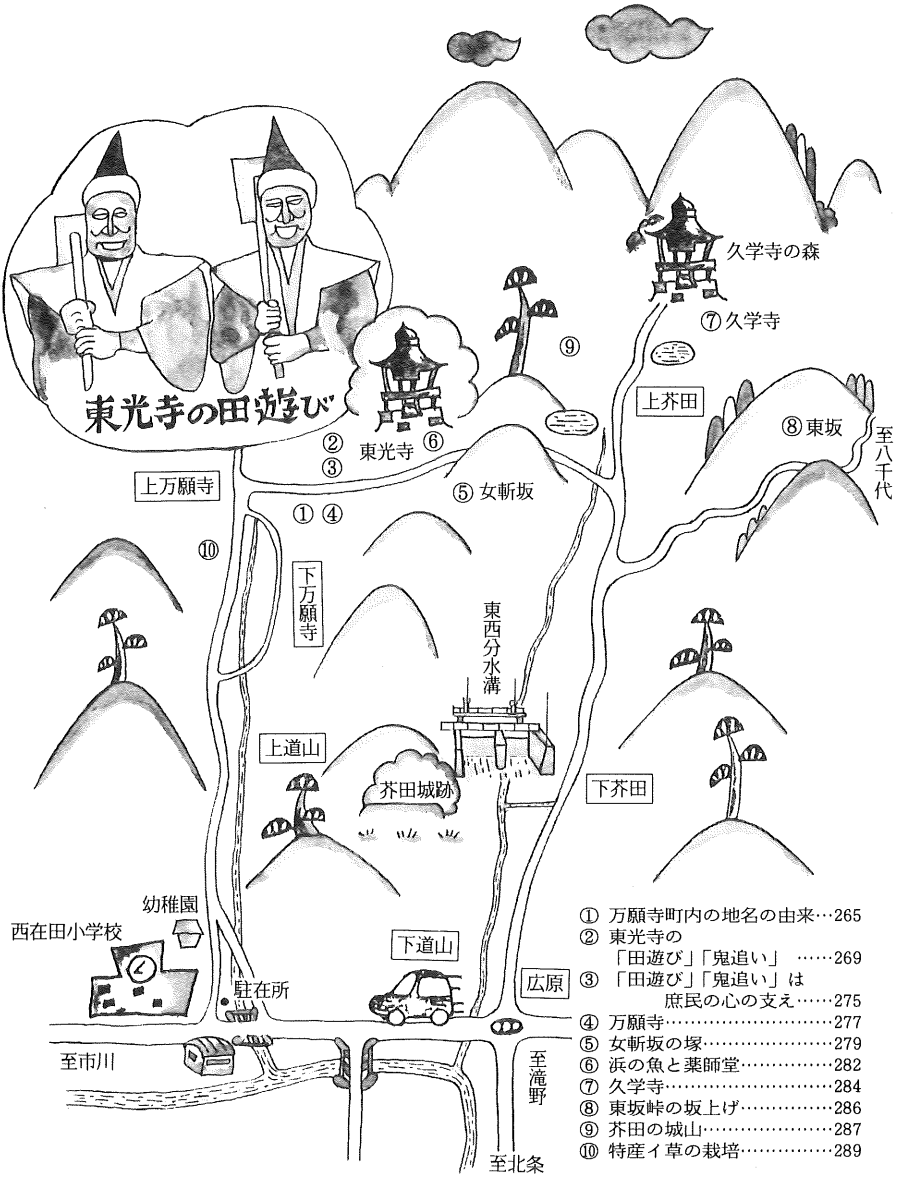
13 道奥の女斬坂　5.0キロメートル



① 万願寺町内の地名の由来…265
② 東光寺の「田遊び」「鬼追い」……269
③ 「田遊び」「鬼追い」は庶民の心の支え……275
④ 万願寺……277
⑤ 女斬坂の塚……279
⑥ 浜の魚と薬師堂……282
⑦ 久学寺……284
⑧ 東坂峠の坂上げ……286
⑨ 芥田の城山……287
⑩ 特産イ草の栽培……289

・東光寺梵鐘（県指定文化財）

銘文によると観応元年（一三五〇）に多可郡の禅光寺の鐘として生まれ、宝徳三年（一四五一）に同郡熊野権現に移された後、文禄四年（一五九五）に満願寺の所有になったことが知られます。鋳上りも良く、銘文とともに貴重な釣鐘です。

・東光寺追儺（ついな）式及び田遊び（市指定無形文化財）

毎年正月の八日の夕におこなわれる「鬼追い」の行事は、道奥のふるさとにふさわしい素朴な行事です。特に「田遊び」は県下では他に類がなく、貴重なものです。

万願寺町内の地名の由来（上万願寺町）

万願寺はその名からわかるように、昔はたいへん大きな寺院があって、古くから開けた所だったと想像できます。そのため、お寺と関係がある地名が数多く残っております。

○嶽山（だけやま）

有明山の裏山続きの一番高い山頂付近で、この地に薬師如来がまつられていたといいます。今もその跡らしいところが残っています。薬師如来は、現在東光寺の本尊としてまつられているものです。

○大門坪（だいもんつぼ）

現在の寺より少し南の方に当る地で、その昔、仁王門があった所と言われております。この大門坪から寺への参道がはっきりと残っています。

○小門（こかど）

仁王門のさらに南の方に位置し、総門（小門）のあった所と思われます。

○寺師（てらし）

大門と小門の中間で、東よりの谷をこう呼んでいます。昔、社等へ出入りしていた大工・左官等の職人が

住んでいた所でしょう。

○釜土

大門から女斬坂へ行く途中をさしています。寺院の瓦を焼いた所と言い伝えております。

○奥の坊

薬師堂の東の谷を「奥の坊」と呼んでいます。この奥に一院があって、それを奥の坊と呼んでいたものと思われます。

○セイメイ井戸

今の金剛院の前の道端にある小さな井戸を、セイメイ井戸といいます。この井戸は、春夏秋冬四季を通じて水温が変わらず、夏は非常に冷たく、冬は暖かい水が、渾々と湧き出て涸れることがありません。水質もよく水量も豊富です。

昔、寺僧の修行に使った閼伽井であろうと思われますが、なぜセイメイ井戸という名がついたかは定かではありません。

一説には、平安時代中期の天文学者であった安倍清明という人が掘った井戸であるから、「清明井戸」というとも、また一説には、この水が実に良い水でいつも涸れることがなく、生命を活かす水であるという意味で、「生命井戸」と呼ばれるようになったとも言います。

○西の峰

有明山から西北にそびえる峰です。戦国時代、天文の兵火に焼討(やきうち)された時、一山の本尊阿弥陀如来(あみだにょらい)（法道仙人の作と伝えています）を守護してここに仮安置し、お祀りしたとのことです。現在もその跡が残っていて、江戸時代、金剛院を興す時までおよそ百年の間、この地にお祀りしておりました。

○仏尾

西の峰の本尊へお仕えしていた人たちの通い道であったと思われます。轟の谷がそれです。満願寺再興の時、この本尊を背負って下りた道だから、「仏負」とも書くそうです。

○しんど坂

今のお寺の近くの小さい坂です。西の峰より本尊を迎えた時、寺の近くのこの小さい尾根にさしかかったら、「しんどいのう」と阿弥陀(あみだ)さまが言われたので、一同はここで休息したと伝えています。なお、この北側には最近まで、毘沙門(びしゃもん)堂が建っていたのです。

○ボンのかち

今の上万願寺の中程の所に、「ボンのかち」と呼ばれている所があります。有明一山の全盛期、この地にも坊があったので「坊のかち」と呼んだのが、「ボン」という発音になったものと考えられます。現在この地に五輪塔が祀られています。なお「梵」の字を使っている書類もあります。

○とのがち

ボンのかちのすぐ近くに、「とのがち」と呼ばれる所があります。昔、寺のこと、村のことについて出入りした役人の宿泊所になっていたので、「殿がち」と呼ぶようになったのでしょう。

○城ヶ端（じょうがはな）

城ヶ鼻、城ヶ端、状ヶ端、状ヶ花等、いろいろな字をあてています。この尾根の上に城があったことは事実で、戦国時代、上万願寺の物見の城山からこの城への連絡に、ハトやタカを使って文書を交換していたようです。

その鳥が手紙を落としたので、書状が花のように散ったことから、「状ヶ花」というようになったとのことです。城跡には地神さんが祀られています。

（朽木照瑞氏）

東光寺の「田遊び」・「鬼追い」（上万願寺町）

上万願寺町の東光寺は、天台宗比叡山延暦寺の末寺で、孝徳天皇の白雉二年（六五一）、法道仙人の創立による古刹である。

本尊に薬師如来を安置する。この尊像は、行基菩薩の作と伝えられる。昔は有明山満願寺と号し、多数の寺院を擁して栄えた寺であった。

天文七年（一五三八）十二月、赤松氏の兵火に焼かれ、寺院は全焼という不幸にあったが、本尊薬師如来は不思議にも火中にあって少しも損傷を受けず、焼け跡に忽然と姿を現わしていたという。

森四郎左衛門たちの尽力で、天文九年（一五四〇）二月再興を見、有明山東光寺と改称したものである。なお、本堂（薬師堂）に安置されている仁王尊像は、有名な運慶の作と伝えられ、長い年月でいたみも大きいが威風堂々、立派な作品である。

この東光寺では、毎年正月八日の夜に比叡山の行事に合わせて、鬼会の儀式が行われる。一時中断の時もあったが、再興されて現在に引き継がれ使用されている鬼面や衣装などは、天保十三年（一五四四）下万願寺町の森八重郎という人が改作したものである。

儀式は、午後八時頃、本堂拝殿で「田遊び」から始まる。この田遊びは福太郎・福次郎・田主が、種蒔(たねまき)から収穫までのしぐさをして、五穀豊作を祈るものである。

福太郎・福次郎には、万願寺の厄年の男があたり、黒い面に烏帽子(えぼうし)をかむり、裃(かみしも)をつけて、手に木製の鍬を持って登場する。この二人には、それぞれ頭に手ぬぐいをかぶった介添えがつく。田主には寺の法師さんがなり、翁(おきな)の面をつけて軍配(ぐんばい)を持つ。

福太郎が今日は吉日なので田起こしをする旨(むね)の口上を述べ、福次郎とともに耕すしぐさをして、田遊びがはじまる。

「千町萬町・拾萬町ばかり……」

の苗代を耕し終った後、田主が軍配をふって

「今年の秋の月の輩(やから)には、尺の穂立に向かうぞ、さいわいなるかな、さいわいなるかな……」

と豊作を約する。その後、福太郎・福次郎が

「種を蒔こうよ、福の種を蒔こうよ」

と、半紙に包んだ籾(もみ)（米）を蒔く。参詣人(さんけいにん)も一緒に「ソーレ・ソーレ」と用意して来た米を拝殿に蒔く。次に

「苗がはえるまで縄をなおうよ……」
と、縄をなう所作をした後
「縄をのおたれば、苗がはえたか見てこうか」
といい、苗を取って田植をするしぐさをするのである。最後には
「入り来る唐箕は、倉の中へゾーロリ、ゾーロリ」
と、豊作を祝う唱えごとを述べて、この田遊びの儀式を終る。
この儀式は、兵庫県下では唯この東光寺にだけ伝わっている非常に貴重なものである。ここに田遊びの台詞を引用すると、次の通りである。

「田遊び」

福太郎　あらじめや、あらじめや、まず今年の草木は、いつもより早げなり。とくして農具をととのえ、完納を始め、打たばやと存じ候。福次郎殿、ましますかな。福次郎候々。
福太郎　まずもって、今日は吉日とおぼえ候。千町が坪を苗代と定め、峩徳神の方に向って打蒔きせばやと存じ候。福次郎殿、打ち給え。
福次郎　福太郎殿、打ち給え。
福太郎　さあ、志歌をうたおう。一鍬が下に一千束も加利加利。二鍬が下に二千束も加利加利。三鍬が下

に三千束も加利加利。

福太郎　千町萬町拾萬町ばかりの苗代をこしらえたれば、田主殿を呼んで種(たね)をあてよう。種をあてよう。

田主殿。田主殿。

田　主　ほうい、ほうい。

あらじめや、あらじめや、今年の草木はいつもより早けき事ぞや。とくして農具をととのえ、打たばやと存じ候。福太郎殿、福次郎殿、ましますかな。

福太郎　候々。

福次郎　候々。

田　主　先ずもって今日は大吉日と覚え候。千町が坪を苗代と定め、歳徳神の方に向いて種を打蒔き始めたれば、今年の秋の月の輩(やから)には、尺の穂立に向うぞ、さいわいなるかな、さいわいなるかな。

上拾萬町は、薬師如来の御為に、福の小餅の種をあてるよと申したるが、あてたるかな。

福太郎　こぼし餅加えて、あてて候。

福次郎

田　主　中拾萬町は、堂塔修復の為、出来を小餅の種をあてよと申したるが、あてたるかな。

福太郎　はびろく加えて、あてて候。

福次郎

田　主　下拾萬町は、今夜参詣の善男善女の為に、恵美の小餅の種をあてよと申したるがな、あてたるかな。

福太郎　あん餅加えて、あてて候。

福次郎

田　主　神妙、神妙。

福太郎　種をあてたれば、種を蒔こうよ。種を蒔こうよ。福の種を蒔こうよ、福の種を蒔こうよ。今夜参詣人、諸願成就の為に、余るように蒔こうよ。

福太郎　千石萬石拾萬石ばかり種を蒔いたれば、苗がはえるまで縄をなおう。縄をなおう。そうろりよう、そうろりよう。稲の葉も、そうろりよう、そうろりよう。千束万束十万束ばかり縄をのおたれば、苗がはえたか見てこうか。ほほう。はえたりやな、はえたりやな。おとごま殿のけずりがみのように、あっぱれはえたりやな、はえたりやな。苗がはえたれば、おとごま殿を呼んで苗を取ろう。福次郎

殿を呼びたまえ。

福次郎　ほうい、ほうい。取りよう、取りよう、わが取る苗は、一つ葉が二つ葉、三つ葉が四つ葉。
殿も原へまします。川にせん水、めじろの柳、田を作らば門田を作れ。
入り来る唐箕は、倉の中へぞうろり、ぞうろり、ぞうろり。

田遊びが終わると、引き続き「鬼追い」の行事となる。

赤鬼が松明、青鬼が矛を持って、堂内をあばれまわり、悪霊・災難を追い払うのである。この鬼にも、万願寺の厄年の男が厄ばらいのため鬼になり、大きな鬼の面をつけ、木綿の衣にわらじばきといういでたちである。

鬼は、本尊薬師如来が、夜叉に化身されて悪魔を払われる姿を現わしているという。従って「鬼追い」は、「鬼を追う」のではなく、「鬼が悪魔を追う」行事なのである。

鬼は松明・矛を縦横に振りまわして暴れまわる。見物人も「オニコソ・オニヨ」「オニコソ・オニヨ」とはやしたてて、興を添えていく。

振りまわし、柱や床に打ちつける松明の火の粉と、黒煙の中で、鬼がかけまわる様は、堂内を一種異様な雰囲気に包みこむ。

数分間暴れまわった鬼が本尊の裏手の穴の中にかくれると、手に手にカシの木で作った手製の刀を持ったオンノコ（鬼の子・青年たち）が現われ、二人一組になって打ちあったり、床を打ったりして、カチカチとリズミカルな音をたてる。鬼は十二回（うるう年は十三回）出入りを繰り返す。

最後に鬼が引きあげると、堂内にシバと名づける椎の木を立てて左右に六個ずつ鬼シバの花（削り花）をつけてあるのを、みんなが奪い合う。これを持ち帰ると、けがれを払い厄よけになるという。

また、万願寺の各戸から集めた餅米で一個二斗五升（三七・五キログラム）の餅を、二個、薬師堂の両側の柱にシバとともに立てて供えてある、鬼は矛と槌でこれを割る所作をする。この餅は、後（のち）、上下両万願寺一七〇余戸に切って配られ、厄よけにする。

（石田恭順氏の資料より）

「田遊び」「鬼追い」は庶民のこころの支え

全国いたるところで戦の渦がまき起こり、優勝劣敗の鉄則によって、力ある者は弱者を踏み台にしながらのしあがっていった戦国の時代。そのはげしい激流は、ここ加西の山里にもいやおうなく押寄せて、幾度（いくたび）となく村人たちの生活をのみこんでいった。

軍馬のひびきが近づいて来ると、山に逃げこむのがせいいっぱい、わずかばかりの食料の貯えも掠奪され戦の後に残るものは、敵・味方のむくろと無惨に踏み荒らされた田畑の姿だけであった。

村人たちの生活は、たとえ戦がなくても、それはそれは苦しいものであった。一間か二間しかない土間にむしろをしいただけの家に住み、粗末な麻の着物をきて、米を作りながら、そのほとんどを年貢として納めてしまうため、麦や雑穀が主食であった。その上、干ばつや低温、イナゴなどの病害虫で、凶作になることも決してめずらしいことではなかった。

村人たちは、ひたすら神仏に平安を祈り続けた。東光寺に伝わる追儺式（鬼追い）は、平和を願う心からなる祈りであったし、「田遊び」はまた、やむにやまれぬ豊作への願いであったのだ。

しかし、過酷にも、兵火はきまって村人たちの心のささえである神社や寺院を、焼きはらっていった。それは、敵兵のひそむ場所になりやすく、何よりも人を動かす力をそなえていたことが恐かったからである。

満願寺（東光寺）は、天文七年（一五三八）赤松の兵火にかかった。村人たちは、燃えさかる猛火の中に飛びこんで本尊をとり出し、別の場所にうつしてお祀りした。

若井の染暦寺に残る寺宝の愛染明王の掛軸は、この寺がかつて兵火にあった時、本堂が焼け失せたにもかかわらず火中から出て境内の大杉にかかっていて無事であったと伝えるし、同じ若井の東光寺には、かつて猪坂に安置されていた毘沙門天や、清水山に祀られていた如意輪観音像が残されている。いずれも兵火の中

から捨て身の努力によってとり出されたものにちがいない。
村人たちは、想像を絶する悲惨な逆境（ぎゃっきょう）の中にあって、いよいよ、神や仏を信仰し、生きる望みと希望をつないだのである。

満願寺（上万願寺町）

その昔、万願寺の男が京見物に出かけたとき。
見物でつかれはてて、やっと宿屋にたどりついて、体を休めていたんだ。そこへ宿屋の女中が出て来て、お茶を差し出しながら、
「京の都は、すばらしいでっしゃろ」
と京自慢をはじめたんだとさ。
つかれているから、うわの空で聞いていると、
「京にはたくさん立派なお寺がありますが、中でも千願寺は、それはそれは立派なお寺ですから、ぜひお参りしなさい」

という。

これを聞いた男は、

「うちの播州には、満（万）願寺がありますよ。桁（芥田）の長さが一里もある、それはそれは大きなお寺です」

と答えたんだとさ。

お女中は

「へえーッ」

とびっくりして

「そんな立派なお寺なら、ぜひお参りしたいものです。どうかわたしをつれていって下さい」

と頼んだ。

すかさず男は、

「そりゃあ、是非お参りしなされ、しかしのう、その満（万）願寺にお参りするには、二日もかかる二ヶ坂を越え、ほうて上がらんならん方坂を登って、十日もかかる東坂を通ったすえ、女が通りかかると切られてしまう女斬坂をこさにゃならん、なかなか難儀ですよ」

といったんだとさ。

女中は、さらにびっくりして、ほうほうのていで部屋を出ていったとさ。

（立脇照氏の話より）

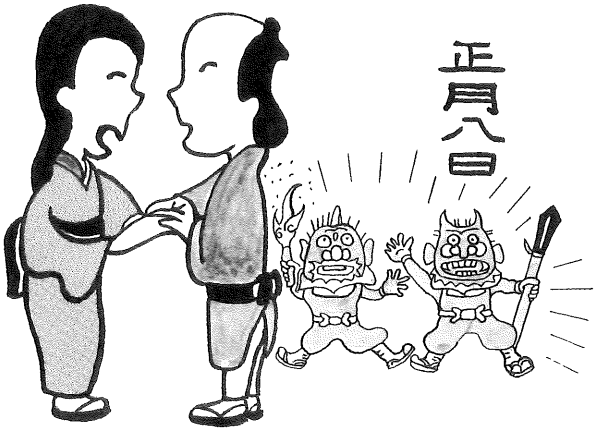
女斬坂の塚（上万願寺町）

上万願寺から上芥田へ越す峠の坂を、「オナキリ坂」と呼んでいます。この坂の頂上に二つの塚があります。この塚には次のような悲しい恋物語がひめられているのです。

昔、万願寺に、てる、というたいそう美しい娘が住んでいました。この村ではどこの家でも、田畑の仕事のあいまに、機織りをするのが女の役目になっていましたから、てるも機織り仕事に精を出しました。女たちは、織った布を二、三日に一度やってくる糸屋の小僧に手わたし、いくらかのお金と原料の糸をもらうのです。

糸屋からやってくる若者は、名を市兵衛といい、働き者のうえ心のやさしい青年でした。てるは市兵衛にたびたび出合っているうち、いつしか心をひかれるようになっていきました。やがて二人は恋におちたのです。

でも、てるには親の決めた許嫁があったので誰にも相談できず、ただ一人思い悩んでいたのです。何度も何度も市兵衛のことを忘れようとしましたが、忘れようとすればするほど思いはつのるばかりでした。やがて二人は、親の目、人の目をぬすんであいびきをするようになりました。日も西に沈みかけた頃、市兵衛



が仕事を終えて万願寺を後に東の坂を越す時にしめしあわせて、峠の辻でしばしの逢瀬を楽しむのでした。

人に知られないようにと、気づかいながらの短い語らいでしたが、たび重なるにつれて、両親の知るところとなり、村人のうわさにのぼり、やがて、許嫁の耳にも入るようになりました。両親は、てるをしかったりなだめたりして、市兵衛をあきらめさせようとしました。今まであいそのよかった近所の人たちも、てるに白い眼を向け、顔をそむけるようになったのです。その上、許嫁の源四郎までが、しばしばてるの家にやって来ては、てるにいい寄り、色よい返事をしないてるにつらくあたるようにさえなったのです。

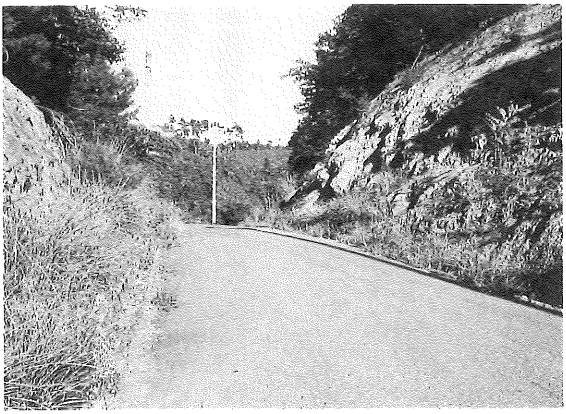
まわりから反対されると、恋の炎はより燃えさかるもの、てるの市兵衛を慕う気持はいよいよ強くなっていきましたが、東の坂でのあいびきはできなくなってしまいました。そこで二人は、ひそかに「鬼追い」祭りの夜、人出にまぎれて合う約束をしておりました。

いよいよ正月八日の、東光寺の鬼追い式の日がやってきました。てるはうれしさを化粧にあらわし、美し

く着飾って家を出ました。松明を打ち振るはげしい鬼の動きも、ぼんやりとしか目に映りません。約束の時間が待ち遠しく、こっそり人垣をぬけて東の坂の辻までやって来たてるを待っていたのは、恋しい市兵衛ではなく、いいなずけの源四郎だったのです。てると市兵衛が合う約束をしていることを聞きつけて、待ち伏せしていた源四郎は、人影を市兵衛だとばかり思って、うれしそうにかけ寄ってくるてるの姿に逆上してしまいました。源四郎は、てるが「アッ！」と驚きの声を上げるひまもあたえず、てるに切りつけました。恋に狂った恨みの刃は深く、てるの晴着を真赤な血に染めてしまったのです。

その時遅く、てるの名を呼びながら峠を登って来た市兵衛が見たのは、美しい恋人の姿ではなく、見るも無惨に息たえた、てるのあわれな姿だったのです。市兵衛は、てるのなきがらを抱きながら、恋しさの余り自害して後を追ったといいます。市兵衛が十八歳、てるは十六歳であったそうです。

今も残る峠の辻の二つの塚は、道を隔てて、北側が市兵衛、南側がてるの墓です。いつの頃からか、人々はこの坂を「女斬坂」と呼ぶように



なりました。そして二つの塚は、比翼塚といわれ恋の悲劇を物語っています。この塚ができて以来、嫁入り行列が峠を通る時は、必ず北側の塚のまわりをまわってから通過するようになりました。この塚の周囲は、年を経るに従って、茨や小笹が生い繁り、着飾った花嫁自身がそこをまわることができなくなったので、花嫁と最も近い血族の者が、花嫁のいつも使用している鏡を持って、塚をまわることになりました。もしもこの習慣を破って、花嫁行列がここを素通りすると、必ず祟りがあって夫婦が死別するか生別れになるか、極めて不幸に陥るといいつたえています。

（円満一夫氏の話より）

浜の魚と薬師堂（万願寺町）

昔のことです。ある日万願寺の高い山の上にお祀りしてある薬師堂へ、浜の漁師風の人が尋ね尋ねて、お参りにきました。そしてその日から後には、薬師堂への参詣人は日増しに多くなってきました。

不思議に思った村人が、参詣に来た人にそのわけを聞くと、高砂の浜から来た漁師だとのことでした。そして、次のような話をしました。

ちかごろ浜はたいへんな不漁続きで、くらしも次第に苦しくなってきました。村の人たちは何度となく寄り、いろいろと対策の協議を繰り返しましたが、よい考えも出ず困りはてていました。

そして、誰言うことなしに、何かの祟りやといい、あちこちの神様、仏様にお祈りをしていたところ、ある日、年老いた見るからにみすぼらしい坊さんが通りかかり、村人の困りはてているようすを見、そのわけを聞きました。

村人が不漁つづきで困っていることがわかると、急に大声で拝みはじめ、三日三晩飲まず食わずで一心不乱に拝み続けました。そして三日後の明方になって

「北の方にある高い山の上に、霊験あらたかな薬師如来さまがお祀りしてある。その如来さまにお願いして、海の見えるその高い山から下の平地におりてもらいなさい」

と言われ、どこかへ行ってしまわれました。

そこで、山の上におまつりしてあるお薬師さんはどこなのかみんなで捜しまわり、万願寺の薬師如来さんだとわかりましたので、こうしてお参りに来ているのですと話すのでした。

このように浜の人達が大騒ぎしているのを知った領主の村上助右衛門が、万願寺の東光寺の住職へ、山から平地におりてもらうことの依頼状を何度となく送ってきました。万願寺側もそのため幾度となく会合を開き、最後にはお互いに助け合うのも人の道だということになり、薬師如来さまを山から下りてもらうことに決めました。

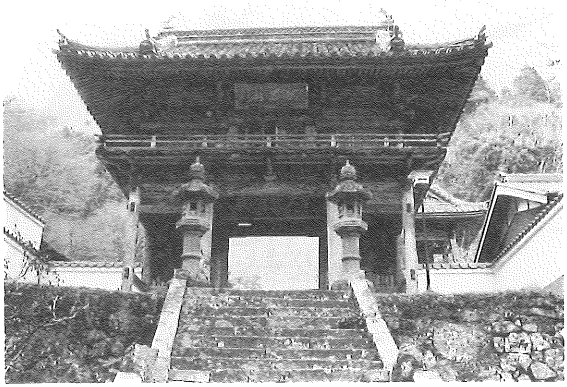
喜んだ領主の村上助右衛門や浜の人々は、何がしかの金子（きんす）と材木を送ってきました。こうして東光寺の薬師堂は現在地に下り、浜は豊漁が続くようになったとのことです。そして、薬師堂のあった東光寺の裏山は、今も薬師岳（やくしだけ）と呼ばれています。

（円満一夫氏の話より）

久学寺（上芥田町）

久学寺は山号を河上山といい、文安三年（一四四六）性光禅師の開基（かいき）と伝える。赤穂城主浅野家の菩提寺（ぼだいじ）として有名で、赤穂義士ゆかりの寺である。

当時、日吉、宇仁、西在田、在田の大部分が赤穂領であったため、元禄十四年三月浅野（あさの）内匠頭長矩（たくみのかみながのり）が江戸



殿中で刃傷事件をおこしたときも、大石良雄は日頃親交の深かったこの寺の住職と囲碁を楽しんでいて、悲報に仰天し途中の囲碁を放り出して急いで赤穂に帰城したという。

長矩が切腹、浅野家所領没収となったとき、大石良雄は当寺の住職に浅野家代々の位牌をまっってほしいとたのんでいる。久学寺にはこの依頼の手紙が四十七士の位牌とともに保存されている。

東坂峠の坂上げ（上芥田町）

上芥田町にある東坂峠は、今は自動車が通れるほどの道に改修されましたが、それまでは県道とはいいながら、荷車がやっと通れるか通れないかの細い曲りくねった峠道でした。一歩ふみはずせば、絶対助からないような絶壁も、各所にひかえておりました。

この東坂は、今から二十年前までは、加西郡（加西市）の一部であった大和村（八千代町）の人たちが、北条町や姫路などへ出るときは、必ず通らなければならない難所でした。

大和村では、高い山々に囲まれた冬季の冷えこみを利用して、天然凍豆腐の生産が盛んでしたので、大和村の男たちは、朝早くからこの凍豆腐を大八車につんで、北条や姫路、飾磨までも売りに出かけておりました。

男たちは、つんで来た凍豆腐を売る代わりに、豆腐の原料の大豆を

買い入れましたので、東坂を越して大和村に帰ろうとする頃には、もう日はとっぷりと暮れかけておりましたし、一日中方々を車を引いて歩きまわっておりましたから、すっかりつかれきっておりました。

重い大豆をのせた大八車を引いて、このけわしい東坂はとうてい越せません。これを見た上芥田の人たちが、いつの頃からか、誰からともなく、この峠越えに手助けをするようになりました。

自分の家に大切に飼っている牛を出して、この大八車を引かせたのです。

牛の鼻を引くのは、上芥田の女の人の役目になりました。

それからというものは、日暮の峠道を、牛に引かせた大八車がゆっくりと登っていくのが、東坂の風物詩となりました。

（立脇照氏の話より）

芥田の城山（上芥田町）

上芥田町城山の頂上に東西十八メートル、南北二十七メートルにおよぶ城郭跡（じょうかくあと）があり、世良田氏の築いた城址ということです。

城主世良田氏の祖先は、源義家にあたると伝えられ、新田義貞が播磨を領した時代には満義という人が義

貞に従って戦功をたてたことが知られています。

室町時代に入ってこの地に赤松氏が勢力を伸ばしてくると、世良田氏は赤松に味方し、嘉吉の乱には世良田和泉守勝広が、小谷城主直操や善防山城主則繁等と共に山名軍と戦いました。

その後、応仁の乱には世良田勝則が赤松政則に従って山名宗全と戦いましたが、中でも別所則治（別所城）や高田兼清（田原城）ら赤松の武将とともに、神崎郡粟賀に出て但馬竹田城主小田垣景近と戦った戦は壮烈でした。激戦の末、小田垣氏を敗った世良田氏は、政則から旧地一万貫を賞せられたと伝えられています。

今も「構居」と呼ばれる土地があり、古い井戸も残っているので構居跡と知ることができます。天文の頃（一五三〇～五〇）家久という人が一族とともに姫路野里に移住し、姓に郷里の「芥田」をとって芥田五郎右衛門家久と名のり、鋳物業を始めました。全国でも屈指の砂鉄産地であった宍粟・佐用の鉄を使い、独特の製法をあみだして作られた製品は、特に「野里鍋」の名で珍重され、一般庶民ばかりか、幕府や宮中でも使われましたので、野里は鋳物師の町となり栄えました。芥田家は、のち芥田と呼び変えられましたが、代々五郎右衛門の名を受けつぎました。姫路市五郎右衛門町は、これから出た町名ということです。

特産藺草の栽培

江戸時代の加西市の特産物としては、北条のむしろ、高室石・長石などの石材、富田の指物、それに北条の竹細工と藺草（畳表の原料）などがあげられる。

このうち藺草の栽培と畳表の製造は、嘉永年間（一八五〇頃）に備前より導入したと伝えられるが、窪田町の「山下家文書」等によると、中世末（一六〇〇頃）には導入されたようである。

栽培地域としては、旧富田村・賀茂村あたりから在田・西在田村あたりまで、かなり広い範囲で作られたが、土質・耕作面積などの関係で旧西在田村あたりに定着したものと思われる。

冬季に植えて酷暑と天候を相手に刈り、蚊の群とたたかいつつ織る畳表の製造は、「血吸い草」とよばれる重労働であった。こうした悪条件を克服しつつ栽培し続けられたのは、それらの村々の平均耕作反別が少なかったためと思われる。藺草による収入は、稲作の十倍といわれ、大正から昭和期では一戸あたり一反前後を栽培していた。

この藺草栽培も太平洋戦争後、急におとろえ、昭和五十二年の柏木正雄氏（下若井町）を最後に、まったく消滅したようである。

（「ふるさとのまち加西誌」より）